
——書評——

安孫子信他、『思想 2009 年 12 月号』
(岩波書店, 2009, 280 頁)

天野恵美理

2009 年はベルクソン生誕 150 周年の年であった。本誌は、それを記念して組まれた特集であり、鼎談と 12 本の論文からなる。

本誌は、特にテーマを設けておらず、内容は多岐に渡っている。そこでまず注目されるのが、藤田尚志氏によるサーヴェイ、「ベルクソン研究の現在」である。ここには、1990 年から現在までのベルクソン研究の世界的動向がまとめられている。氏によれば、「ここ十数年のベルクソン研究の動向を一言で言い表すならば、「ポスト・ドゥルーズ的方向性の模索」という言葉に尽きる」。我々は今なおドゥルーズによるベルクソン読解の影響下にあるのであり、それとどう距離をとるか、ということが問題なのである。これは独り藤田氏のための主張ではなく、冒頭の鼎談でも同じことが語られている。

そこで、本書評では、いずれも「ポスト・ドゥルーズ」的なものとして書かれつつも各々の方向性を示す、二つの論文に注目する。檜垣立哉氏の「記憶の実在—ベルクソンとベンヤミン—」と、藤田尚志氏の「ドゥルーズか、ベルクソンか—何を生氣論として認めるか—」である。

まずは、ドゥルーズの専門家である、檜垣氏の論文についてである。氏がはじめに

注目するのは、ベルクソンとベンヤミンの両者の著述が、ともに消費文化の勃興期のなかで世界の文化の中心であった 19 世紀のパリと深く結びついていることである。ベンヤミンが写真や映画というメディアを考察対象としたことについては改めて述べるまでもない。ベルクソンについては、『物質と記憶』において、過去の即時的実在がそれ自身現実化されうるイマージュであるということから、写真やシネマ装置といった、この時代の技術性との関連が見てとれる。よって、氏は 19 世紀のテクノロジーというラインに沿って両者を比較していく。

さて、そのラインにおいて第一に挙げられる両者の共通点は、両者とも、テクノロジーの進歩に中立的であったということである。ベルクソンは、基本的にはスピリチュアリズムに連なる思考として受けとられているが、しかしベルクソニズムのいわば終着点ともいえる『道徳と宗教の二源泉』において、機械的なものと神秘的なものは、互いに「呼びかけ」合い、「要求し」合うという、積極的関わりをもつ。つまり、両者の協働によって、人間固有の進化が可能となるのだ。一方のベンヤミンにおいては、「複製技術時代の芸術作品」における「アウラの衰退」の議論、すなわち〈いま—ここ〉がもつオリジナルさの消失についての議論が名高いが、氏によれば、人口に膾炙したこのきわめて分かりやすい図式に抗して、以下のような読みが可能である。すなわち、氏によれば、アウラの「凋落」とは、「礼拝

的」とされていた芸術の社会的機能が特に大衆政治的なものに収奪されることであり、さらにこの論考自体が、当時隆盛していたファシズムに対し、「 Kommunismusは芸術の政治化をもって応える」と締めくくられている以上、アウラの凋落とはまずは政治化の内実に関わるものであって複製芸術自体の価値に関わるものではない、と解釈できるというのである。

さらに、氏はベンヤミンにおけるアウラの定義とベルクソンにおける過去イマージュの實在についての議論とを、ともに複製技術に着想を得たであろうものとして重ねあわせる。「写真小史」等における、ベンヤミンによるアウラの定義とは、「どれほど近くにであれ、ある遠さが一回的に現れているもの」、夏の午後、遙か彼方の山並みを、それがどれほど近いものであれ遠さとして見ることに、として述べられる。氏によれば、そのように近さを遠さとして保ちつつ、すべての距離をパースペクティヴから逸脱した遠景において確保するような一回性とは、映画や写真といった複製芸術によってこそ可能となる。というのも、カメラの眼は、我々人間の意識が有用性に従って排除するものをも、すくい取ってしまうからである。

ついでベルクソンにおける過去の實在についてであるが、「イマージュ」とは、それが見えるものを示すかぎり、ベルクソンが捉える連続体であり真の實在である持続のなかで、その切断面である現在に定位されるものでしかなく、持続的な存在者が現在

に参与するときの「認識理由」でしかない。それゆえ、持続のほとんどをなす「純粹記憶」の領域は、それ自身では見えない＝イマージュ化されないもののはずである。しかし、そうであるなら、即自的な存在である純粹記憶は、なぜ、あるいは何によって、それとして知られるのだろうか。

即自的な過去の生成についてベルクソンが特に述べているのは、『精神のエネルギー』所収の「現在の想起と誤った認識」においてであるが、ここで氏が注目するのは、「鏡」という一種のイマージュ装置の比喩が用いられていることである。すなわち、「現在の想起と誤った認識」において、現在がイマージュとして形成されるとともに、その鏡像的な裏面として、潜在性としての過去が生成すると述べられているのであるが、氏によれば、ベルクソンによる過去それ自身の「残存」についての主張においては、その機制がイマージュを形成する裏面に張りついている装置性において描かれているということが、とりわけ重要である。さて、過去の実在が、そのありえないイマージュ性において提示されうるのは、技術化された映像によってだけである。すなわち、技術化された映像こそが、存在はするが見えるはずのないものが見えるものとして、しかも現在のアクチュアル性とは異なった仕方によって提示しうるのである。

このように両者の類似点を挙げたうえで、氏は、「縮約」という場面においてこそ、この議論が深められると述べる。そこにおい

て氏はベルクソンの議論に欠けているところを指摘しつつ、今後の研究に示唆を与えるのである。詳しくみていこう。

ここで意図されている「縮約」とは、現在時における過去の縮約のことである。すなわち、過去の「実在」そのものがイメージ化不可能なものであるならば、見てきたように写真や映画のうちで、それが過去自身の縮約として「現実化」されるのとは別の仕方、現在のアクチュアル性そのものに関与する縮約が必要となるのである。

ベンヤミンにおいて縮約とは、宇宙大に広がった世界の理念をその俯瞰的な視線において把握する時に、それ自身が結晶化されたモノイドとして姿を現すという仕方であらわされる。さて、映像のクイックモーションにおいては、歴史の自然史的な縮約を、まさに地球史や人類史を包括する仕方、イメージ化することが可能になる。それゆえ氏は、ベンヤミンのモノイドロジック的叙述は、ベンヤミン自身が映像テクノロジーの世紀に居合わせているがゆえに可能となっているはずであると主張する。

ベルクソンにおいてはどうか。現在時における過去の縮約についてベルクソンが思考しているテキストは、『物質と記憶』の第四章である。しかし、ここでのベルクソンの記述は、赤という色彩の質の生成について書かれているにとどまり、きわめて限定したものであるといえる。というのも、その質とはあくまでも、我々の知覚という、限定された枠組みの内部における縮約によってい

るにすぎず、縮約の成果としての質が、はたして自然史的な歴史性の水準にまで及ぶものなのかが、不明瞭であるからだ。

それゆえ氏は、知覚というモデルから離れ、進化の先端にある生命体としての我々について考察すべく、『創造的進化』を参照する。しかし、氏によれば、ベルクソン自身は、『物質と記憶』第四章で描かれているような、多様なリズムとその緊張度の差異から形成される縮約を見いだすことはなかった。氏によれば、ベルクソンの述べる生命体それ自体は、あくまで「進化したもの」であって「進化しつつあるもの」ではないのであり、より具体的には、ベルクソンの議論には「生殖する質としての身体」という観点がきわめて希薄なのである。

よって、機械と精神の協働という、先に述べた『二源泉』での主張が本来適用されるべきは、生殖の場面ではないかと氏は考える。そして、すでにベルクソンともベンヤミンともさらにはドゥルーズとも異なった、俯瞰的映像機械や生殖身体への介入テクノロジーが与えられている今日において、細胞資質としての我々の生へのテクノロジーの関与について論じられる必要性が示されて、本稿は締めくくられる。

ついで、藤田氏の論文に移ろう。本稿は、ベルクソンとドゥルーズに関して、両者の漠然とした共通性ばかりが意識されてきたここ数十年のベルクソン研究を問題視し、両者の根源的な差異を明確にする試みとしてあらわされたものである。

氏は、生氣論の観点から、ドゥルーズとベルクソンとを比較する。両者ともに、機械論と結合しうる生氣論、すなわち有機的なものと無機的なものの境界線が無効にするような、新たな生氣論を目指していたことにおいて共通している。

ところが、氏によれば、『差異と反復』以降のドゥルーズ哲学は徐々に、現働化（潜在性が、区別された諸々の種や部分としてあらわれ得ること）から潜在性そのものへと、すなわち現働化を純粹に潜在的な出来事自身の折りたたみ／折り開きとして捉える方向へと、向かっていく。それゆえ、ベルクソンが『物質と記憶』から『創造的進化』へと向かうのに対して、ドゥルーズはあたかも『創造的進化』から『物質と記憶』へと向かっていくようなのである。このような概観をふまえたうえで、氏は、ベルクソンが（非）有機的な生の哲学を展開した一方、ドゥルーズは非・有機的な生の哲学を展開したとして両者を対置する。

ベルクソンの生氣論が（非）有機的であるというのは、機械や星辰までも巻き込んでいくという意味で、單純に有機的ではないということである。ベルクソンの生氣論は、それらを巻き込みつつ、行動し創造する。さらにベルクソンは『物質と記憶』第三章冒頭において、純粹記憶、記憶心像、純粹知覚という三つの項について、これら諸項の境界を明確に定めることが不可能であると述べているが、それは常に現働化を解してのことである。ベルクソンにおいて

生成は、絶えざる現働化においてなされる。

それに対してドゥルーズの非・有機的な生氣論においては、行動の放棄、すなわち觀照性、受動性としての創造というテーマがますます強まっていった。またドゥルーズは、現在さえも現働性から解放しようとする、現働化の徹底的な忌避を「反・実現」と呼び、出来事の反・実現に対する運命愛を全うすることこそ哲学の使命であり哲学者の倫理であるとさえ述べている。

ごく簡単にまとめると、「中心点としての主体をもたない欲望機械の果てしない連結がそのまま生命となるドゥルーズに対し、ベルクソンにあっては、超意識的な生命の流れが機械までも生命化する」のである。

さて、「ポスト・ドゥルーズ的ベルクソン研究」という観点から、以上の二論文を概観してきた。檜垣氏の論文はドゥルーズの手法を新たな側面に適用することによって、藤田氏の論文は両者の哲学の違いそのものに焦点を当てることによって、「ポスト・ドゥルーズ的」方向を模索していると言えるのではないだろうか。それぞれ別個に見ても得るところの多い論考であるが、とりわけ一冊の雑誌に収まった両氏の論文を並べてみることで、一口に、「ポスト・ドゥルーズ的」といっても、そうした研究の仕方自体、実は、研究者が各自で編み出していかなければならないことが、この模索たる所以であると、如実に感じられるのである。

文献

檜垣立哉 (2000). 『ベルクソンの哲学—生成する実在の肯定』, 勁草書房.